

# 村木新次郎先生のご退休を祝して

大 島 中 正

村木新次郎先生が同志社の社員となられたのは一九八八年四月のことでした。爾来二九年にわたって教授として同志社女子大学の研究と教育に貢献されました。一九九七年には大学院に修士課程が、さらに二〇〇〇年には博士課程が設置されましたが、先生のご指導のもとで九名の博士が誕生しました。学部が学生をふくめ一人を優にこえる学生たちを常にきびしくみちびかれました。

本学が同志社女学校の時代から大切にしている時間にチャペルアワーがあります。村木先生も二〇〇一年六月一九日に京田辺キャンパスの新島記念講堂で奨励をされました。奨励題は「P先生のこと」(讚美歌は『讚美歌21』7番1節。聖句は新約・ローマの信徒への手紙8章18節。)でした。京都府立大学の学生であった村木青年の心をとらえた、恩師の一人について

てのお話でした。世間のはやり・すたりに適当に調子をあわせることなく、学生に迎合することもしないP先生。大学では社会で役にたたないことをのびとまなべという趣旨のことが30年余の歳月をへた今日も村木先生の心の糧になっているというお話。わたくしも、そのご奨励にききいったことをなつかしくおもいだします。ある卒業生が「たとえ自分のかんがえが少数意見であつても大切にしなさい」と村木先生にはげまされたことがわすれられないといっていました。この卒業生のことばに接したとき、わたくしは、P先生のおしえが村木先生にしっかりとつがれていることを実感し感動しました。

本学の歴史をつたえる機関誌の一つに『しばぐさ』があります。先生はその第三二号(一九九二年七月一七日発行)の編集委員長をつとめられました。「私の三冊」という特集がくまれ、

教職員一人一人にアンケートが実施されました。(一) 青春時代の思い出の本、(二) いま、学生に勧めたい本、(三) 最近読んで印象深かった本を各自が一冊ずつ紹介するという企画でした。リベラルアーツを建学の精神とする本学に実にふさわしい特集であったとおもいます。村木先生ご自身は、(一) トーマス・マン『トニオ・クレーゲル』(岩波文庫、新潮文庫)、(二) 金田一春彦『日本語 新版』(岩波新書)、(三) 李御寧『縮み』志向の日本人』(講談社、学生社)の三冊をあげていらつしゃいます。「本にしたしむ——ときには、ひとりで、静かな時間を——」と題する特集の趣旨をかかげる文章は、先生によるもので、「図書館のかたすみにでも、これらの本をまとめた『三冊の本』コーナーができれば、とひそかにねがっています」としめくられています。いつの日か両キャンパスの図書館に「私の三冊」のコーナーが誕生すれば、すばらしいとおもいます。

先生のご専門は、日本語の語彙と文法です。代表のご著書は『日本語動詞の諸相』と『日本語の品詞体系とその周辺』で、いずれもひつじ書房から刊行されています。いずれ、語彙に関する論考を中心とすご著書を上梓されるとうかがっております。

す。長年、学恩をたまわつてきた者として、たのしみにしておられます。先生があらわされた論文からは、ことばの森をみわたすことと同時に一本一本の木を丁寧に見察することの大切さがつたわつてきます。初山踏みも専門家と称しうる人たちにも、刺戟をあたえるのが特長であるとおもいます。えらびぬかれた実例、全体をフランスよくみわたした明快な論述から、おおいに啓発された後生がこれからも誕生することでしょう。先生は、「勉強は、半分はひとりで、あとの半分は仲間といっしょに」をモットーとされています。国立国語研究所で、ドイツや中国で先生がまじわられた研究者たちのことを、ぜひともかたりおろしていただきたいものです。二〇世紀後半から二一世紀の初頭にかけての、日本語教育や言語情報処理といった世界が脚光を浴びていた時代を後の世につたえる貴重な証言となることでしょう。

チャペルアワーのご奨励、『しばぐさ』の特集「私の三冊」をはじめ、村木先生が本学にのこしてくださったよきものをつかしくおもいだしつつ、感謝の念をこめて無辞をたらねました。

村木新次郎先生、ありがとうございます。